



要精密検査となったら…精密検査へつなく

2016年の日本耳鼻咽喉科学会福祉医療・乳幼児全国会議で報告された、「1歳児、2歳児の精密聴力検査機関実態調査報告」（回収率100%）のデータからは、1歳児で精密検査の目的で初診した児1,148人のうち、新生児聴覚検査を受け、一側または両側**REFER**であったのは231人（20.1%）であり、2歳児で精密検査の目的で初診した児1,124人のうち、新生児聴覚検査を受け、一側または両側**REFER**であったのは77人（6.9%）でした。

1歳児（1歳以上2歳未満）で初めて難聴が発見された児のうちの20%、2歳児（2歳以上3歳未満）で初めて難聴が発見された児のうちの7%が、新生児聴覚検査で要精密検査であったにもかかわらず、精密検査を受けていなかったことになります。

このことはせっかく早期発見の機会がありながらそれを逃してしまったという、たいへん悔やまれる事態が生じていることを示し、要精密検査となった児を、早期に確実に、精密検査へつなぐことが、強く求められています。

そのためには、精密検査医療機関への確実な紹介と、市町村や福祉保健所との連携によるフォローが非常に大切です。

## 《市町村役場保健師への連絡》

### 【精密検査受診までのフォロー】

- ・産科退院後、精密検査受診までのフォローが必要です。  
要精密検査と告げられた場合、母親は、心理的に非常に不安定になります。  
現実問題として、産科医療機関でのフォローには限界があります。  
→ 市町村役場にフォローを依頼します

### 【公費の場合】

- ・公費の場合は、所定の連絡票新生児聴覚検査結果連絡票（FAX送信票）をFAXすると、市町村役場の担当保健師から新生児聴覚検査実施医療機関へ連絡があります（翌日以降になる場合もあります）。

### 【里帰り出産等による私費（自己負担）の場合】

- ・市町村役場に早期に訪問や相談の対応をしていただくため、公費に準じた内容（例：59ページ）で市町村役場へFAX連絡します（市町村への連絡については、申込書兼同意書に記載されています）。市町村役場の担当保健師から新生児聴覚検査実施医療機関へ連絡がありません（翌日以降になる場合もあります）。

【私費の場合の様式例】

全額個人負担(私費)用

新生児聴覚検査結果連絡票(FAX送信票)

年 月 日

市町村母子保健課 御中

市町村名( )

みほん

所在地  
医療機関名  
氏 名

印

新生児聴覚検査で要精密検査と判断されました。今後のフォローをよろしくお願いします。

ふりがな	性別	生年月日	
新生児氏名 <small>お名前が決まっていたら、ご記入ください。</small>	男・女	年 月 日生	
保護者氏名 (母の氏名)			
住 所	電話番号 ( )		
1回目検査	年 月 日	1回目検査結果	右 PASS(反応あり) REFER(要再検査) 左 PASS(反応あり) REFER(要再検査)
再検査実施日	年 月 日	日 齢	日
AABR検査結果	右 PASS(反応あり) REFER(要精密検査) 左 PASS(反応あり) REFER(要精密検査)	判定	要精密検査 (両耳 REFER) (右・左 REFER)
再検査結果で 要精密検査となった場合	下記のことを実施し、実施した場合は口に✓を入れてください。 <input type="checkbox"/> 母子健康手帳に結果を貼付 <input type="checkbox"/> 検査結果の説明  <input type="checkbox"/> 精密検査が必要な場合は精密検査について説明 <input type="checkbox"/> 精密検査紹介先医療機関 高知大学医学部附属病院耳鼻咽喉科・(県外の場合の紹介先 ) <input type="checkbox"/> 高知大学医学部附属病院紹介の場合は、予約センターに紹介予約 <input type="checkbox"/> 診療情報提供書を、大学予約センターにFAX <input type="checkbox"/> 受診予約日を保護者に連絡 <input type="checkbox"/> 診療情報提供書を保護者に交付  <input type="checkbox"/> 児の住民票のある市町村へ、4枚目の新生児聴覚検査結果連絡票(FAX送信票)をFAX		
特記事項	・在胎週数( )週 出生時体重( )g Apgarスコア 点(1分) 点(5分) ・以下に該当がありますか あり(該当項目に☑)・なし <input type="checkbox"/> 高ビリルビン血症(交換輸血施行) <input type="checkbox"/> 子宮内感染(風疹など) <input type="checkbox"/> 頭頸部の奇形 <input type="checkbox"/> 人工換気療法(5日以上) <input type="checkbox"/> 先天聴覚障害の家族歴 <input type="checkbox"/> 耳毒性薬剤使用(妊娠中、周産期) <input type="checkbox"/> 臍帯血pH(実施していれば) ( ) <input type="checkbox"/> 先天異常症候群( ) ・その他特記事項		
使用機種	ネイタスアルゴ(バージョン ) エコースクリーンII MAAS (シリーズ名 ) MB11ベラフオーン MB11クラシック その他( )		
医師名	その他 担当者名	連絡先電話 ( )	

(医療機関の方へ)

○精密検査が必要になった方について、この検査結果連絡票をFAXしてください。市町村役場から電話にて確認します。

※この方は、私費(全額自己負担)で検査を受けておられますが、貴市町村への連絡にあたっては、検査申込書兼同意書により同意を得ています

●FAXを受信した市町村は、検査実施医療機関に電話連絡し確認してください。

## 《要精密検査の連絡票を受け取った市町村役場では》

- ・連絡票の FAX を受け取ったら、折り返し発信元の医療機関に連絡を取り、児、親の氏名、連絡先や検査結果など、必要な情報を入手します。
- ・電話の場合は必要な情報を聞き取ります。
- ・家庭訪問（新生児訪問、乳児全戸家庭訪問事業を利用してもよい）を早急に実施します。産科医療機関から連絡があったら、できるだけ早く（数日以内に）訪問してください。
- ・母親は、例外なく、大きなショックを受けているため、精密検査の受診まで、寄り添う支援が必要となります。
- ・育児相談会場に来ていただく方法や、産後ケアを実施している場合は、産後デイケアに来ていただくことも考えられます。しかし、ショックが大きく、**多くの場合、なかなか集団の場へは出てこれられないように思います。**
- ・母親の身体面、心理面、社会面のリスクが高いなど、場合によって市町村は福祉保健所と連携、協働して対応します。具体的には、61 ページの「この段階での母親支援」以降を参照してください。
- ・なお、市町村保健師からは、まず親に連絡を取りますが、紹介元医療機関には、高知大学の予約日、もし来院した場合は精密検査に関する診療情報提供、もし予約日に来院しなかった場合はその旨について、高知大学の地域連携室から連絡があります。必要な場合は、検査実施医療機関（紹介元）に再度お願いをして情報を入手してください。

## 《精密検査の重要性について》

- ・新生児聴覚検査の結果、要精密となっても、精密検査を受けなければ難聴の早期発見は難しくなります。
- ・しかし、親が、精密検査を受けなければならないということを、受け入れられなければ、精密検査を受けないまま時が経過し、結果的に難聴の発見が遅れる事態が考えられます。
- ・精密検査の結果、難聴があった場合、高知県では早期療育の仕組みがあります。
- ・しかし、乳幼児の難聴については、親を含め、まだ社会の十分な理解があるとはいえません。このことが、精密検査の受診をためらう大きな要因になっています。
- ・適正な知識を普及させていく必要があります。難聴にかかわる関係者（言語聴覚士、耳鼻咽喉科医師、ろう学校教員など）に加えて、多くの母子保健関係者の支えが必要です。

## 《この段階での母親支援》

### ◆自分を責める母親

- ・難聴の疑いがあるとされた場合、「なぜうちの子が」という当惑のあと、「なんでちゃんと産んであげられなかったのか」などと、多くの母親が自分を責めます。
- ・周囲の力、特に家庭の力、すなわち実父母や夫、夫の父母が母親に対して支持的であると、立ち直りが早いようです。
- ・その逆だと、母親は孤立し、精神的にも非常に不安定な状態に置かれます。

### ◆育児不安

- ・通常、子育てには少なからず不安があるものですが、きこえとの関係でさらに特別な育児が必要なかと心配になります。
- ・一般的な子育てと変わらないこと、子どもを可愛がること、育児を楽しむことが大切と伝えてください。きこえに特に配慮した子育てについては、専門家の指導に任せるのがよいです。
- ・親に「がんばりすぎないよう」に伝えることも大切です。

### ◆愛着形成の問題

- ・新生児期に障害の疑いを指摘されると、愛着形成に障害が起こる可能性があります。
- ・難聴でも同様の心配があります。ただ、新生児聴覚検査の事例では、あまり聞きません。実際には、精密検査未受診児の中に埋もれているだけで、関係者が知らないだけかもしれません。
- ・要精密となった家庭については、保健師さんが十分気をつけて見守ってあげてください。

### ◆家庭内の問題に遭遇したら

- ・夫や親族など、家族が検査結果を「認めない」ことは、よくあります。
- ・その結果、母親は板挟みになり、赤ちゃんのきこえが心配でも精密検査に連れて行けず、産後の心身の疲労の中、さらに孤独に苦しむことになります。
- ・「家系」とか「たたり」など、母親が夫の親族から一方的に責められる場合も想定されます（まるで昔の小説の中の話のようですが、今でも現実には起こっています）。
- ・短期的に家庭内の問題を解消するのは難しいので、保健師は産科医からの連絡をうけたらできるだけ早くコンタクトを取り、コンタクトの中で状況を察知し、寄り添う支援を行いながら、粘り強く精密検査に結びつけます。

## 《親が精密検査の受診をためらった場合》

### ◆精密検査の受診をためらう

- ・親が聴覚検査の結果を受け入れられず、精密検査の受診をためらうことは、少なからずみられます。
- ・世間一般の人は、「きこえに問題がある」ということを、「全くきこえない」と理解しています。
- ・実際は、程度も種類も非常にさまざまなのですが、この時点で細かな説明しても、気が動転しているので、おそらく理解していただけないと思います。やむを得ないものと思います。

### ◆母親との接し方

- ・最初に要精密検査であることを告げる産科での対応は、重要です。
- ・要精密検査となった時、産科医からの説明を十分に理解できる親は少ないです。「頭が真っ白になって」とよく表現されます。従って、前掲の「精密検査受診のお願い」のような説明文を用意しておく必要があります。
- ・母親からは、産科医師や助産師、看護師など医療スタッフとの信頼関係が語られることが多いです。「退院まで毎日泣いていたが、産科医や看護師がずっと寄り添ってくれた」という声をきく場合もあれば、「とても冷たい対応を受けた」「『うちではよくわからないからともかく耳鼻科へ行って』と突き放された」という話を聞く場合もあります。
- ・親（ことに母親以外）からは種々の質問を受けるかもしれませんが、産科では、難聴に関する専門的な説明や保健指導には限界があります。精密検査のときに、専門医から丁寧な説明がありますので、粘り強い受診勧奨をお願いします。

### ◆退院までに精密検査の了解が得られなかった場合

- ・産科を退院すると、受診勧奨は市町村役場にゆだねられることとなります。退院までに紹介予約ができない場合、その旨を必ず市町村役場へ連絡してください。
- ・市町村保健師は、精密検査を受ける意思が確認できたら、産科医に連絡し、紹介予約をしていただけるようならお願いしてください。産科医で、作成が難しいようであれば、予約方法等について高知大学医学部附属病院予約センター（088-880-2773）へ連絡をお願いします。
- ・また、1か月児健診や予防接種で受診する小児科医師から受診勧奨していただくこともおいに有効です。

#### ◆精密検査実施中の支援

- ・ひとことで「精密検査」といっておりますが、新生児から乳児の時期の聴覚の評価は、かなり専門的な技術を要しますので、結論が出るまでにやや時間がかかる場合もあります(6か月以上かかることもあります)。
- ・その間の医療から脱落しないように、市町村保健師からは、乳児健診の機会などを利用して、定期的な声掛けをお願いできればと思います。この場合、「結論が出るまでにやや時間がかかる」ことについての説明は専門家に任せ、親の気持ちに沿った支持的なフォロー(傾聴やねぎらいなど)をお願いします。

※検査の実施主体である市町村は、精密検査結果について、親等への支援及び県・国への結果報告及び精度管理のため、情報入手が必要となります。高知大学医学部附属病院と市町村との間で相互連絡を行い、精密検査の結果は市町村へ送付されます。

#### ◆精密検査の結果、要療育である場合の支援

- ・親は事実を受け入れなければなりません、その過程で心理はいろいろと揺れ動きます。
- ・保健師には、つらい思いに対する傾聴や、支持的な支援をお願いいたします。
- ・中等度難聴の場合は、大きな音(ドアを閉める音など)はきこえるため、ことばが増えてくる2歳の誕生日ごろまでは、日常生活の中で親はあまり難聴の実感がないかもしれません。そのため、療育や定期通院から脱落しやすいです。市町村保健師から、乳幼児健診の機会などに、療育や定期通院の状態を確認しましょう。

#### ◆精密検査の結果、難聴がなかった場合の親の心理への対応

- ・要精密の児で難聴があった割合は約4割ですから、精密検査の結果、最終的に問題なしとなる場合が過半数です。
- ・新生児から乳児の時期の聴覚の評価は、かなり専門的な技術を要しますので、結論が出るまでにやや時間がかかる場合もあります(6か月以上かかることもあります)。
- ・そのため、最終的に問題がないとなった場合に、親には「ああよかった」という気持ちとともに、「長期間に亘った検査は無意味だったのか、今までの不安はなんだったのか」「必要のない検査で長期間ふりまわされた」等の気持ち(不満、怒り)が生じることがあります。
- ・この体験が、以降の医療機関受診や健診を忌避することにつながる場合がありますので、相手の心をくみ取りながら上手に支援します。
- ・また、「耳のことに気をとられすぎて、十分な愛情を注げなかった」という自責の念が生じる場合もあります。支持的にフォローが必要です。

